



人類学、靈長類学者/京都大学理学研究科 教授

## 山極 寿一 氏



# ゴリラにみる 人類の由来と未来【後編】 —人間社会の基本とは—

日本のゴリラ学の第一人者である山極寿一氏は、ゴリラを通して原初人類の生活、行動進化の過程を解明することを目的として、長年にわたって中央アフリカの熱帯雨林ジャングルに通い、人間家族の由来や人間に独特なコミュニケーションの起源などを考察してこられた。長年のフィールドワークの結果、「凶暴」「危険」と思われてきたゴリラが、実は平和を愛し、豊かな心をもっているということを知った山極氏。今回、ゴリラの社会や行動の中に、人間関係や人間社会の問題を理解するためのヒントがあるのではという思いから、山根寛氏にインタビューを行っていただいた。

後編である今回は、引き続きゴリラと人間の社会、家族形態、発達などの話が深まった。さらに、ゴリラを通して捉えた人間社会の基本から、人間社会が進む道について、示唆に富んだインタビューとなった。



山根 寛 氏（京都大学大学院 医学研究科、作業療法士）



## 背中が与える安心

山根 “触れる”ということにも、触れ方がありますね。言葉で触れて、視線で触れて、そして実際に身体で触れることがあります。私たちが子どもに関わる時には、最初から身体に触れるることはできませんから、まずは声をかけて、目で見て、大丈夫かなというその関係性の中で、そっと触れてみる。触れることができるようになると、一緒に遊んだりできるのです。接触は、精神科ではとても危ない部分も含んでいます。その人の中、テリトリーに入ってしまうことですからね。

ゴリラは相手を確かめる時に、人間にも触ったりするのですか。

山根 人間は言葉と同じように、手にあまりにも重きを置きすぎています。ゴリラの接触には、いろんな部分を使います。手のひらを使わず、ナックル部分（軽く曲げた指の手背の部分）で接触するのです。プロ野球でも、こぶしとこぶしを当てるでしょう。あれがゴリラやチンパンジーのやり方なのです。この方がむしろ、相手との間の節度を保っているやり方なのだと思います。

もう1つ、お腹での接触がとても大きいです。ゴリラは、お腹とお腹を合わせるのです（図1）。足が短いから、座ったらお腹が出ます。お腹とお腹が触れ合う。これがすごくいい。子どもは、シルバーバックという、背中が白い大きなオスのお腹に抱きつきます。それが、とても安心できるやり方なのです。



図1 お腹の突き合わせ

また、背中も非常に重要です。だからこそ、ゴリラの大きなオスの背中は真っ白なのですね。これに子どもたちは強く引かれて、その背中にもたれたり、背中の毛をいじったりします（図2）。背中に乗っている時は、目と目を合わさずに済みます。自分が見られていない状態で背中を提供してもらっている。つまり、座布団をもらっているようなものですね。そこでいろいろなことを許してもらっているという、強い共有関係をもつことができるのです。

人間だと、触れる時には必ず手が入ってきますが、手は言葉以上に操作的なもので、“何かされている”という感じがしますね。それを受けたためには強い許容力が必要なのですが、お腹とお腹の接触は、お互い対等なのですね。どちらかが何かをする、あるいはされているという感じがしません。背中の場合には、とても大きな許容力を相手に示します。つまり、座布団を提供してくれて、「さあ、座ってください」と言われているような感覚があるのです。そ



山根 寿一（やまぎわじゅいち）

1952年、東京生まれ。1975年、京都大学理学部卒業。1982年、カリソケ研究センター（ルワンダ）客員研究員、1983年、日本モンキーセンター研究員、1988年、京都大学霊長類研究所助手を経て、2004年より京都大学大学院理学研究科教授。国際霊長類学会会長、理学博士。1978年からアフリカ各地で、ゴリラの野外研究を行う。ゴリラの保全活動でも、アフリカでNGO活動を通じて国際的に活躍する。著書に『ゴリラ』（東京大学出版会、2005）、『暴力はどこからきたか—人間性の起源を探る』（日本放送出版協会、2007）、『ゴリラ図鑑』（文溪堂、2008）、『人類進化論—霊長類学からの展開』（裳華房、2008）『家族進化論』（東京大学出版会、2012）他、多数。



図2 子どもにとって、シルバーバックは憧れの背中

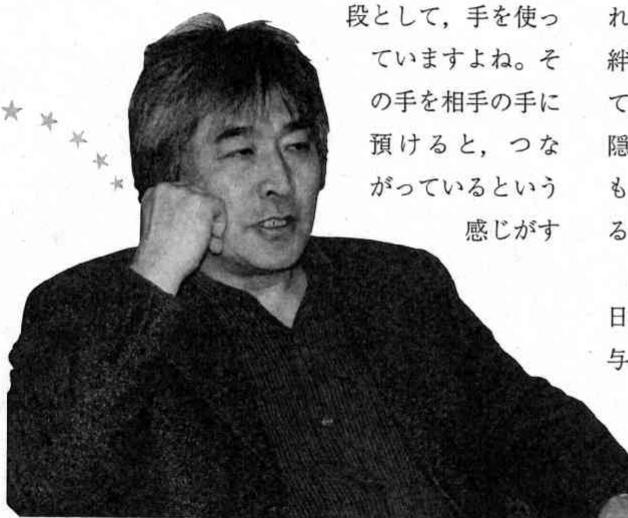
これは手で触るよりも、もっと相手の自主性と、相手の気持ちを重んじたやり方だと思います。

### 人間の手と目の機能

**山根** 思春期の子どもたちが、ドーンと肩をぶつけ合ったりするのと似ていますね。もうちょっと大人になって、いろんな作為的な気持ちが起きてからでないと握手はしないですね。

人間が手に重きを置いたつながり方をしているのは、手がいろいろな機能をもつからでしょうね。引き寄せるのも放すのも、殴るのも。

**山極** 人間は、外界、自分の外の世界を感知する手段として、手を使っていますよね。その手を相手の手に預けると、つながっているという感じがす



「ゴリラの接触には、手だけでなく、お腹や背中などいろいろな部分が使われます」

るのだと思います。でも、人間以外のサルや類人猿のように、よく手を使う動物であっても、そのように手を使用してはいません。人間は、手を主体や方向性を示す道具として切り替えたのだと思います。だから、たとえば指さしもそうですよね。手が方向を示しているでしょう。類人猿には、少なくとも指さしはありません。

**山根** 映画『猿の惑星』は、人間が演じているから指さしをしていたのですね。野生のサルやゴリラたちは指さしはしないのですね。

### ゴリラにみる人の家族の起源

**山根** ほかの動物は、生殖の時以外はあまり、家族で過ごしませんね。ライオンもそうですが、母系社会でしょう。ゴリラは父性が強い父系社会だと、先生は観察なさっているのですが、動物の母系社会と父系社会は、何かの発達の過程で変わっていくのでしょうか。

私たちが、子どもや精神認知機能が低下した退行状態にある人と関わる時、「母性的関わり」「父性的関わり」という関わり方が、関わりのテクニックとしてあります。ゴリラが父性の社会であるということにとても興味があります。

**山極** 家族的な生活をしている動物は、ほかにもいますね。たとえば、オオカミやキツネは、夫婦が連れ添って子どもを育てますから、人間以上に夫婦の絆が強いかもしれません。でも、人間やサルとは違って、それらは肉食動物です。子どもを安全な場所に隠しておいて、夫婦そろって肉を探しに行く。しかも、食いだめがきますから、何日間も食べずにいることができますね。

人間の場合はそうではなくて、サルと一緒に、毎日食べないといけない。赤ちゃんにはお乳をずっと与えないといけません。離乳してからも、子どもは自分でえさを探すことができないから、誰かが与えないといけない。ここがオオカミとは全然、違うところです。子どもを安全な場所に隠しておけないから、サルのメスはずっと子どもを背負って歩きます。

また、毎日えさを食べないといけない草食性動物は、家族生活が最適ではありません。なぜなら、オスとメスとの行動半径がまったく違うからです。そういう動物は、基本的に1頭1頭の縄張りをつくって、繁殖期だけオスとメスが出会う。あるいはメスだけの集団をつくって、交尾期にオスがやって来て種つけをする。そのどちらかなのです。

山根 夫婦が一緒に生活しているのは、ライオンなどですね。

山極 そうです。ただし、ライオンの場合、狩りはほとんどメスがしますよね。交尾期も繁殖期もずっと一緒にいるのは、サルだけなのです。サルでも集団をつくるのは、ほぼ昼行性のサル、明るい世界に住んでいる種類のサルです。

不思議なことに、サルのメスは単独生活をほとんど送らず、メスだけの集団もつくらず、必ずオスと一緒にいます。これは、ほかの哺乳類と違うところです。その中でメスは、必ず集団をつくってオスと一緒に暮らしているのですが、ほとんどの霊長類の集団は母系です。繁殖協力をメスたち同士でやり、オスが出入りをする。それはある意味で、メスが集団をつくって、交尾期にだけオスが入ってくるという形態の変異系と考えていいですよね。メスがいる集団に、オスが代わる代わる連合するというタイプの集団です。

類人猿の生活は、まったく違います。メスが親元を離れてから繁殖をします。娘が母親の元を離れて、血縁関係のないオスやメスと一緒にになって繁殖生活を送るということが、ヒト科の類人猿の特徴なのです。だからこれは、おそらくかなり系統的に決まつた性質なのだろうと思います。つまり、類人猿の祖先が、そもそもそうであった。それを、おそらく人間も引き継いでいると思うのです。もちろん、今はいろんな文化的多様性がありますから、父系的な傾向だけではなく、むしろ母系に近くなっている社会もあるだろうと思います。ただ、繁殖におけるメスの独立性は、類人猿と人間との、共通する特徴だと思います。



## ゴリラの家族と父親（オス）

だから、人間も類人猿もメスにとってはパートナーが重要なのです。繁殖を持続させるためには、ある固定的なパートナーをつくることが大切ですね。それは、集団であってもいいのです。チンパンジーは、オス集団とメスが連合します。ゴリラの場合は、単独の特定のオスと複数のメスが連合する。その結果、ある特定の子どもと、特定のオス（父親）が、持続的な関係をつくる。人間もそうですが、ゴリラは父親がそれをできるのです。

ゴリラの場合、母親が子どもを置いて離れることがありますから、子どもは残ります。子どもと父親の関係が思春期まで続く。そこでおもしろいのは、メスの子どもの場合、小さい頃に自分をケアした父親に対しては、思春期になった時に交尾拒否が起ります。自分をケアしてくれたオスに対して、性的な関心が生まれないんですね。オスも、自分がケアした子どものメスが大きくなった時に、性的関心を抱かない。これを「ウェスター・マーク効果」といいます。

こうしたオスが性的対象にならないから、娘は集団の外に出て行きます。だから、インセスト・アヴォイダンス（近親間での交尾を回避する傾向）と外婚性とは、結び付いているのです。メスが集団の外へ出るきっかけは、自分を世話をしてくれたオスに対する性的関心の欠如なのです。

山根 それは本能的なものなのですか。



「身体接触は、その人のテリトリーに入ることなので、精神科では危ない部分も含んでいます」



**山極** カエルやウズラは、生まれつき親を認知できます。しかし、サルであっても類人猿であっても、生まれつき親を認知することはできず、育ってくれた大人を親と認知します。だから、生みの親ではなくて育ての親が、自分にとっての親なのですね。

サルで実験されているのですが、たとえ血縁関係がなくても、1日に6分間ぐらいの親密な接触、つまりオスがその子どもを抱いてグルーミングをしたり、背中に乗せて運んだりといった接触が6カ月続ければ、もうそれで親としての認知が成立する。メスが大人になった時に、親と認知した父親と交尾をしない関係になるということが報告されているのです。

本当の生物学的な父親ではないと分かっているオスに対して、サルや類人猿、人間の子どもは、そういう認知の仕方をします。つまり、生後、子どもと親密な関係をもつことが、子どもが性的に成熟するようになってからの性的関係を避ける一番いい方法だということが分かってきたのです。それがあるからこそ、父親と子どもの関係は長続きするのです。私たち人間の家族に引き寄せていえば、人間の家族は、性を独占する関係と、性を禁止される関係によってつくられていますよね。夫婦は性を独占する関係であり、夫婦以外の性的関係はすべて禁止されています。その家族形態の原型が、ゴリラにあると考えられます（図3）。



図3 ゴリラの家族

## 家族が単位のゴリラの社会

**山根** ゴリラは、社会という形にはならず、家族の単位だけで動くのですね。

**山極** そうですね。そういう家族的な集団同士が出会う頻度は非常に低いです。それは、オスがドラミングして、互いに距離を置き合っているからです。そのゴリラの集団ぐらいのサイズを「共鳴集団」といいます。いうならば、お互い顔も性格も分かっている。だから、相手の次の動きが予測できる、というような集団ですね。

おもしろいことに、実はそのサイズは、人間の社会でも変わっていないのです。それが10~15人といわれています。人間のスポーツチームは、おおよそ同じ大きさですね。ラグビーチームが15人、サッカーが11人。そうすると、言葉によるコミュニケーションではなくて、お互いに性格も分かっているから、ボールを握って誰かが走れば、何をしたいかが分かり、即座にほかの人間たちが対応できます。

ゴリラの集団もそうです。移動の時に誰かが遅れれば、これは何か起こったのだと察知できる。だから、1つの生き物のように、一体化して動くことができるのです。人間は、言葉によって、その集団を大きくしたのではなくて、いくつもの共鳴集団をつくったのだと思います。人間は、家族だけではなく、日常的にいろんな集団に属している。しかし、それ

ぞの集団の中で、性格も顔も覚えていられるのはせいぜい10~15人なのです。顔と名前が一致するのは、たぶんその10倍ぐらいだと思います。

**山根** 集団療法ができる最大の人数と、ゴリラの1つの家族の最大の頭数は、同じようなものですね。それを超えると把握が難くなります。それぞれの動きがみて、お互いに影響し合ったり、関わりたくない時に少し距離を置ける。それくらいの間合いがとれる人数なのですね。人数が少なすぎると、密度が濃くなりすぎて大変になるので、集団療法の時の適正な数が決まつてくるのです。



## ゴリラに孤独死はない

山根 ニホンザルの群れには、“離れザル”といって群れから外れたサルがいますね。その現象は人間でもみられますが、ゴリラの場合、“離れゴリラ”はいるのですか。

山極 オスだけですが、います。しかも、ちょうど思春期にあたるオスだけですね。年をとるまでずっと1人でいるゴリラはいません。必ずメスがやって来てくれる。というか、メスはそういうオスをほってはおきません。

たくさんのメスがオス1~2頭と暮らすと、オスを巡ってメス同士の衝突が起きます。だからメスにとっても、まだメスがついていない単独のオスの方が関係をつくりやすいので、そっちに移っていきます。しかも、先ほどお話ししたように、自分を世話してくれたオスとは交尾をすることができません。それで集団の外に关心を向けて、若いオスのもとに移籍をしていくことになります。

山根 では、単身生活者や独居老人というのは、ゴリラの世界にはいないのですね。

山極 いませんね。独居老人がいないのは、いくら年をとって能力が衰えても、子どもたちがずっとそのオスについて歩くからです。だから、年をとってもちょっと耳が聞こえなくなったり、目が見えなくなってしまっても、老いたゴリラはずっとその集団にいます。

山根 たとえば、ゾウなどの動物は、自分が弱ってくると群れから離れていくなくなるとよくいわれますが、ゴリラの場合は、その群れの中で死を迎えるのですか。

山極 死ぬ直前ぐらいは、1人ぼっちになることもあります。やはり衰えると群れについて歩けなくなるので、群れ自体も速度を落として、あまり動かなくなります。そこで老衰で亡くなることが多いです。

山根 なんとなく、今の人間の世界より、ゴリラの世界の方が幸せな気もしますね。

山極 そうですね。あんまり、いじめとかもないですよ。

山根 ゴリラは身体の大きさやドラミングなどに

よって、すごく凶暴なイメージを与えられすぎてしまっているのかもしれないですね。



## ゴリラも遊ぶ

山根 もう1つお伺いしたいのが、子どもの発達や正常発達に関してです。思春期を越えてから起きる問題に出会う時に、遊びを通して、いいかたちで人との距離感や関わりのようなものを学んだ子どもと、そうではない子どもでは、ずいぶんその問題が違っているのをいつも感じます。

ゴリラや動物の子どももよく遊びますよね。ゴリラは、どのように遊ぶのですか。

山極 ゴリラの場合は、一番多いのはレスリングと追いかけっこですね(図4)。これは、ほかのサルやチンパンジーと変わらない。また、お山の大将ごっこといって、ちょっと高い所に上って、代わる代わる胸をたたくという遊びがあります。離れて競い合う遊びですね。大人のゴリラもよく遊びます。大人と赤ん坊に特徴的な遊びが、飛行機ごっこです。子どもの両手を持って仰向けに寝転がり、足で子どもの身体を支えるのですね。

山根 よく孫にもしますが、すごく喜びますね。向き合っているし、いつでも保護できる体勢ですから。

山極 人間もゴリラももちろん飛べないのですが、そういう感覚が何かおもしろいのでしょうか。



## 節約志向の人間社会への警鐘

山根 最後に、ゴリラの社会を通してみえた、人間の社会について、先生が思われていることを聞かせてください。

山極 今、人間同士のコミュニケーションは情報に特化しつつありますね。しかし、先ほども言いましたが、言葉はまだ身体化されていません(前号参照)。情報だけのやりとりだと、身体がついていかなくて危険なのです。実際に会って、触れ合ったり、面と向かってコミュニケーションすることによって伝わることがある。電話でもだめなのです。ゴリラの社会をみることで、人間の社会の基本がみえます。

山根 情報のグローバリゼーションといわれていま



図4 レスリングをして遊ぶ子どもゴリラ

す。私たちもテレビ会議を使うようになりましたが、直接会って話すのとは違って、画面で顔を見て話し合うのだと、疎通が難しいことがありますね。

**山極** 今、経済中心の、時間の節約という方向に世界は向かっています。しかし、絶対に節約できないことがあります。それは、食べることと、成長なのです。肉食の動物だと食いためができますが、人間は1日に複数回は食事をしないといけませんね。

**山根** 病院や施設で、「食事の時間を節約して早く訓練をすべき」と言われることがあります。人間の一番基本的な行動を節約して訓練するのは、どうも間違っているように思います。

**山極** 人間の成長に必要な時間というのは、だいた

い決まっているのです。妊娠期間を縮めることもできませんし、身体の成熟を早めることもできません。成長や学習するための時間を十分にとることは、絶対に必要だと思いますね。時間を節約して何もかも効率化が求められていることは、危険だと思います。山根 諸外国をみていても、学齢期に入る年齢は6~7歳ですからね。早期学習もすべて失敗しています。

出会いと関わり、家族と社会、成長と発達、人の生活を支援する作業療法にとって、生活とは何か、社会とは何か、いろいろと思いが広がり、深まるインタビューでした。今日はありがとうございました。